心　象

小南英昭

「image」

Hideaki KOMINAMI

人は五感で感じ取った経験を記憶に残し、その記憶と目の前で感じたものとの組み合わせや、記憶と記憶の組み合わせから、新しい「心象」＝「イメージ」を感じるのではないだろうか。また、芸術家の多くはこれらの手段を用いながら作品を制作するのではないだろうか。ここでは私の制作プロセスを通して「心象」について考えてみた。

私が作品を制作する時は一切下書きというものは描かない。描きたいときにキャンバスに向かい、手が動くままに筆を動かす。

私の表現方法は抽象表現を用いて制作するが、たとえ具象表現であれ、抽象表現であれ、対象物が「ある」「ない」に関わらず、制作者は五感で感じ取った「心象」を目に見える「かたち」や「色」で表そうとしているのではないだろうか。

私の絵を見た人から「この絵は空ですか？」「海ですか？」「夕焼けですか？」とよくたずねられる。私としては先に述べたように下書きも描かず、キャンバスに向かうため、海を描こう、空を描こうと思って描いているわけではない。ただ、全く自然を意識しないで描いている訳でもない。自然の色に感動を受け、その「感動」が「色」に変化し、「心象」として記憶されていることは感じている。ここで私が撮影した自然風景の写真をあげてみた。

資料①－②は日の出を撮影した写真。

資料③－④は海を撮影した写真。

資料⑤－⑥は夕日を撮影した写真である。

この６点の写真と私の作品を見比べて見ても分かるように私の作品は自然の色とは異なる。もちろん絵の具と光が作る色とでは、もともと違うものであるが、しかしながら、絵を見た人は私の絵を通して心の中のイメージと照らし合わせ、心象の風景を思い浮かべる。

私の作品は、私の中の「感動」が「心象」となり、さらに私の「思い」を組み合わせ、メッセージを送る作品へと変化する。その作品を見た人は、作品と見る人の間に生まれてくる「なにか」を感じる。その「なにか」を感じることにより、人はその絵に感銘を憶えるのではないだろうか。この「なにか」とは私のメッセージを感じる人もいれば、見る人の考えで制作者とは違う「なにか」を感じる時もある。私としては「なにか」を共有し「なにか」を語るよりも、作品を通して見る人が自分の解釈で「なにか」を感じることの方が重要であると考える。

本来作品とは制作者の思いを超えて自由に解釈してよいものではなないだろうか。作者によっては違う解釈で作品を見られることに抵抗を感じる人もいるが、私はそうは思わない。しかしながら、一般的には制作者の名前から作品を見たり、人と同じように理解しなければいけないと不安になったり、制作者の意図と違った解釈をしては失礼だとか、このように絵を見る人が多いのも事実である。私としては人それぞれの想像で純粋に作品と向き合って見てほしいと願う。だからといって制作者が曖昧な「メッセージ」や「思いつき」で作品を作っていいとは限らない。なぜなら、制作者の「思い（メッセージ）」と見る人の「なにか」が一致したとき制作者は真の喜びを味わうことができるからである。

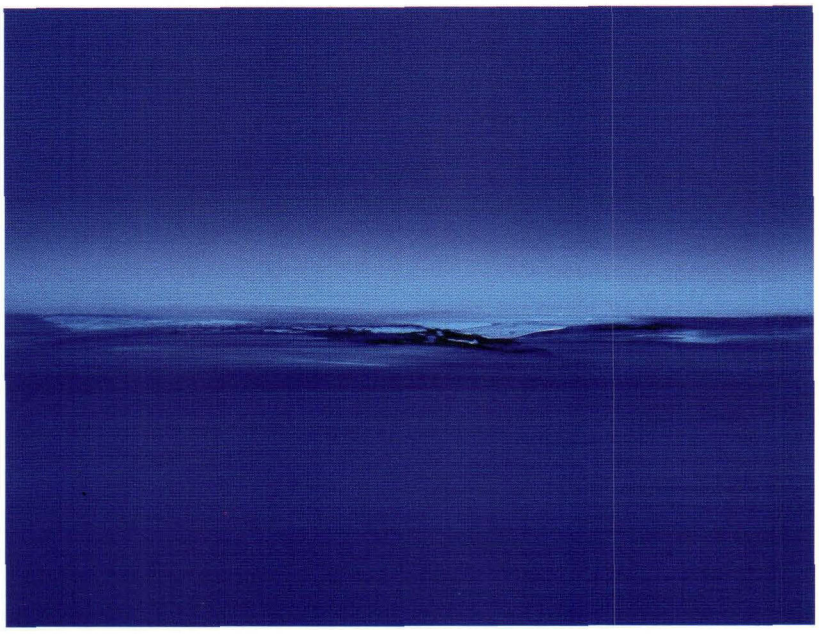
だからこそ制作者は、いつでも真剣に作品と向き合うべきであり、作品に責任を持つ必要がある。

私の作品を通して多くの人が「なにか」を感じることを願う。

心　象

小南 英昭

「image」
hideaki kominami



①	③	⑤
②	④	⑥
⑦		
⑧		

①/②　宇部市 岐波（朝日）
③　山口市（空）
④　長門市日置（海）
⑤/⑥　長門市 油谷（夕日）
⑦　作品1（アクリル）
(500mm×606mm) F12
⑧　作品2（アクリル）
(379mm×455mm) F8